



続 謙澄を巡る人々

その3

題字
棚田看山

皆さん、門司港レトロ口をご存知ですか。今や、北九州を代表する一大観光地です。でも門司港が、戦前は横浜・神戸に次いで我が国第三の貿易港であった事は余り知られてはいません。さらに、この港の開発に末松謙澄が大きな力を発揮した事もです。

当初の明治十九(一八八六)年、ここに港と駅を造営し九州の交通の拠点にしようと考えたのは福岡県知事(当時)の安場保和でした。その意を受け実務を担ったのが、企業救郡長の津田維寧です。津田が業務を始めると、総工費は三十九万円(今の価値に換算すると約六十億円程)で、土地の買収も資金の調達も難航するばかりでした。頭を抱えた津田は、同じ水哉園で学んだ後輩の謙澄に助けを求めたのでした。直ぐに謙澄は財界の大御所、渋沢栄一に門司港開発の重要性と築港会社設立の必要性を説いたのです。渋沢は、快く理解を示して二十五万円(同じく約三十八億円程)を手渡しして協力を約束してくれ



たのです。謙澄は福地源一郎の紹介で渋沢と出会って、自ら主催する「演劇改良運動」や「天

門司港開発にも尽力した 渋沢栄一

覧劇」で苦楽を共にした仲でした。さらに渋沢は、安田善次郎・大倉喜八郎・浅野総一郎の三人の助っ人を紹介し、その三人で計十万円(同じく約十五億円程)の負担をしてくれる事となったのです。

こうして、明治二十一(一八八八)年に門司築港会社が設立されました。翌年より第一区工事が始まり、明治二十三(一八九〇)年には完成し貿易港としてスタートしました。その後、第二区工事・第三区工事と進められ完遂したのは明治三十二(一八九九)年でした。

そして明治二十四(一八九一)年に、黒崎から門司港まで鉄道が開通して、九州鉄道は本社を博多から門司港へ移しました。さらに明治三十一(一八九八)年には、日本銀行西部支店が下関から門司港へ移転となったのです。この間に、三井物産・日本郵船・浅野セメントなど多くの企業や官庁の出先が門司港に集まって来ました。この結果、明治三十二(一八九九)年に小倉より先に市政を敷いて門司市となりました。

この様に、門司港の開発から北九州は発展したのです。その原点に水哉園で学んだ末松謙澄や津田維寧が居たのでした。

文化人末松謙澄を考える会改め

末松謙澄顕彰会 堀史雄